

Krystian Zimerman

Piano Recital Japan Tour 2021



クリスチャン・ツイメルマン
ピアノ・リサイタル 2021年日本公演

J.S. バッハ：パルティータ 第1番 変ロ長調 BWV825

J. S. Bach: Partita No.1 in B-Flat Major BWV 825

- | | | | |
|--------------|----------------|----------|--------------|
| 1. プレリューディウム | 1. Praeludium | 2. アルマンド | 2. Allemande |
| 3. コレンテ | 3. Corrente | 4. サラバンド | 4. Sarabande |
| 5. メヌエツトI/II | 5. Menuet I/II | 6. ジーグ | 6. Gigue |

J.S. バッハ：パルティータ 第2番 ハ短調 BWV826

J. S. Bach: Partita No.2 in C Minor BWV 826

- | | | | |
|-----------|-------------|-----------|--------------|
| 1. シンフォニア | 1. Sinfonia | 2. アルマンド | 2. Allemande |
| 3. クーラント | 3. Courante | 4. サラバンド | 4. Sarabande |
| 5. ロンドー | 5. Rondeaux | 6. カプリッチョ | 6. Capriccio |

* * *

ブラームス：3つの間奏曲 Op.117

J. Brahms: 3 Intermezzi Op. 117

第1番 変ホ長調 アンダンテ・モデラート
No. 1 in E-Flat Major Andante moderato第2番 変ロ短調 アンダンテ・ノン・トロッポ・エ・コン・モルト・エスプレッショネ
No. 2 in B-Flat Minor Andante non troppo e con molto espressione第3番 嬰ハ短調 アンダンテ・コン・モート
No. 3 in C-Sharp Minor Andante con moto

ショパン：ピアノ・ソナタ 第3番 口短調 Op.58

F. Chopin: Piano Sonata No.3 in B Minor Op. 58

- | | |
|------------------------|-----------------------------------|
| 第1楽章 アレグロ・マエストーソ | 1st mov. Allegro maestoso |
| 第2楽章 スケルツォ：モルト・ヴィヴァーチェ | 2nd mov. Scherzo: Molto vivace |
| 第3楽章 ラルゴ | 3rd mov. Largo |
| 第4楽章 フィナーレ：プレスト・ノン・タント | 4th mov. Finale: Presto non tanto |

【2021年 日本公演スケジュール】

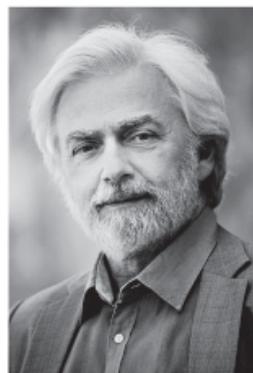
11月14日(日)	17:00開演	【柏崎】	柏崎市文化会館アルフォーレ 主催：柏崎市文化会館アルフォーレ(公益財団法人かしわざき振興財団)
11月17日(水)	19:00開演	【福山】	ふくやま芸術文化ホール リーデンローズ 主催：公益財団法人ふくやま芸術文化財団/広島ホームテレビ
11月19日(金)	19:00開演	【水戸】	水戸芸術館 主催：公益財団法人 水戸市芸術振興財団
11月21日(日)	17:00開演	【福島】	ふくしん夢の音楽堂 主催：ふくしん夢の音楽堂(公財)福島市振興公社、福島市
11月23日(火・祝)	17:00開演	【山形】	やまぎん県民ホール 主催：山形県総合文化芸術館 指定管理者 みんぐるやまがた 共催：山形県、ジャパン・アーツ
11月30日(火)	19:00開演	【川崎】	ミュージアム川崎シンフォニーホール 主催：神奈川芸術協会 協力：ミュージアム川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)
12月4日(土)	17:00開演	【所沢】	所沢ミュージアム アークホール 主催：公益財団法人所沢市文化振興事業団
12月8日(水)	19:00開演	【東京】	サントリーホール 主催：ジャパン・アーツ
12月9日(木)	19:00開演	【西宮】	兵庫県立芸術文化センター-KOBELCO大ホール 主催：兵庫県、兵庫県立芸術文化センター
12月13日(月)	19:00開演	【東京】	サントリーホール 主催：ジャパン・アーツ

【後援】 駐日ポーランド共和国大使館
ポーランド広報文化センター
在日スイス大使館

駐日ポーランド共和国大使館

ポーランド広報文化センター
INSTITUT POLSKI TOKIO文化庁
令和2年度文化芸術振興補助金
子文化芸術活動支援事業
（劇場・音楽堂等の子供鑑賞支援事業）

【協力】 スタインウェイ・ジャパン/ユニバーサル ミュージック



©2018 Bartek Barczyk

クリスチャン・ツイメルマン (ピアノ)

Krystian Zimerman (Piano)

クリスチャン・ツイメルマンにとって音楽とは、感情を時間的に整える芸術である。彼の解釈には、ベートーヴェンやショパン、シューベルトやシマノフスキのいずれを演奏しても、数えきれない表現のニュアンスがあり、その音楽的な語りの明快さがあらわになる。ツイメルマンが現代の最も偉大なアーティストの一人とされるのは、極めて個人的で、細部に至るまで入念に準備された演奏の新鮮さとオリジナリティによるものである。時には何十年もかけて作品を研究し、あらゆる側面や意味内容を探索した上で、リサイタルのプログラムとして、あるいはレコーディングスタジオで演奏することもある。そのアプローチ

は、創造的な発展の活き活きとしたプロセスの一端であり、そこでは自己批判、沈思、直観が重要な役割を果たしている。「最後に芸術を仕上げるものは、コンサートホールにある」と彼は言う。

ツイメルマンの初舞台は、1962年、6歳の少年時代まで遡るが、本格的な演奏家としてのキャリアは、数々のコンクールに優勝した後の1975年に始まる。以来、世界中で2000回をこえる演奏会に出演し、138名の指揮者と共演してきたほか、リサイタル、室内楽の演奏会を行ってきた。また43年以上にわたり、ベルリン・フィル、ボストン響、シカゴ響、クリーヴランド響、コンセルトヘボウ管、ロンドン響、ロサンジェルス響、パリ管、ウィーン・フィルなど、世界有数のオーケストラとレコーディングを行っており、バーンスタイン、ブーレーズ、ジュリーニ、カラヤン、コンドラシン、小澤征爾、タルなどの指揮者とプロジェクトを共にした。

録音は1976年以来、ドイツ・グラモフォンの専属としてリリースされている。自身が結成したオーケストラと、ショパンのピアノ協奏曲を弾き振った録音ではゴールド・ディスク、クワドラプル・プラチナ・ディスクを受賞。2017年9月には、シューベルトの最後の2つのソナタのCDを25年ぶりのソリアルバムとしてリリースし、世界中から賞賛された。

ツイメルマンの初来日は、1978年9月のリサイタルツアーだった。以来、日本で257回、30プログラムに及ぶリサイタル、協奏曲、室内楽の公演を行ってきた。

2018年は、バーンスタイン生誕100年の年であった。バーンスタインとツイメルマンの間には15年に及ぶ長い関係があり、数々の優れたオーケストラと、ストラヴィンスキー、ベートーヴェン、バーンスタインなどを録音。ツイメルマンはその合間に、バーンスタインの100歳の誕生日に共演する約束をしていた。そこで2018年、ツイメルマンはこの記念年を祝うため、バーンスタインの交響曲第2番「不安の時代」をロンドン響、フィルハーモニア管、ベルリン・フィルほか多くの主要オーケストラと東京と大阪を含む世界の主要な公演地で共演。また、この作品をラル指揮/ベルリン・フィルと共演したCDも2018年にドイツ・グラモフォンよりリリースされた。これは、作曲家にして指揮者であるこの偉大な芸術家、バーンスタインと多くの舞台を共にしたアーティストによる、最も壮大なオマージュともいえる。先達への感謝と尊敬の念を表すことは、ツイメルマンの芸術家としての重要な原動力の1つである。

フランスのレジョン・ド・ヌール勲章受賞(2005年)、デンマークのソニングス賞、イタリアのアカデミア・キジアーナ賞、ポーランドにおける民間人の最高勲章である、星付きコマンドルスキ十字勲章 (Polonia Restitua Commandeur Cross with Star, 2013年) など、荣誉ある名誉博士号や勲章を受賞。

J.S. バッハ：パルティータ 第1番 変ロ長調 BWV825

舞曲の性格を持つ同じ調の曲を組み合わせた「組曲」は、バロック時代の重要な器楽曲の形式である。大作曲家ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685～1750)は、自国ドイツの伝統をふまえながら、フランスとイタリアの音楽的特徴的な要素を加味し、1つの様式に融合させて、バロック組曲の頂点を築いた。バッハが鍵盤楽器のために残した6曲の「パルティータ」は、1726年から1曲ずつ別々に出版された後、1731年に「クラヴィーア練習曲集第1巻」として全6曲がまとめて出版された。この6曲は、バロック組曲の伝統的な構成を受け継いでいるが、冒頭の曲の名称はそれぞれ異なり、また、組曲を構成する舞曲の配列などに自由な扱いが見られる。

変ロ長調で書かれた「パルティータ」第1番は、全6曲から成る。組曲を構成する各舞曲の本来の性格は、この第1番ではあまり崩されることなく、ほぼ忠実に踏襲されている。そして、全体に漂う明朗闊達な雰囲気印象深い。

「プレリューディウム」 組曲の始まりを告げる堂々とした前奏曲。

「アルマンド」 流れるように滑らかな旋律の動きを、特色としている。

「コレンテ」 「コレンテ」とは、イタリア型の速い「クーラント」のことであり、歯切れのよい三連符のリズムで進む。

「サラバンド」 第2拍にアクセントを伴う舞曲サラバンドの、荘重さが強調されており、豊かな装飾が施されている。

「メヌエットⅡ」 メヌエットが2つ現れる。ⅡはⅠのトリオとして扱われ、Ⅱの後にダ・カーポで再びⅠが演奏される。

「ジーグ」 ジーグにしては珍しい4分の4拍子で書かれている。技巧的であることに加えて、後半に減七和音の連続が見られることなどが注目される。

J.S. バッハ：パルティータ 第2番 ハ短調 BWV826

ハ短調で書かれた「パルティータ」第2番は、全6曲から成る。終曲として「ジーグ」ではなく「カプリッチョ」が採用されている点などが、特徴的である。

「シンフォニア」 「シンフォニア」は元来、イタリア・オペラの序曲を意味するが、ここでは、「フランス風序曲」のように大規模な構成になっている。重厚な序奏で壮大に始まり、ゆるやかな中間部を経て、フーガで締めくくられる。

「アルマンド」 穏やかな曲調で、歌謡的な旋律が奏でられる。

「クーラント」 フランス型のクーラント、つまり、拍子が4分の6拍子と2分の3拍子の間を交替して、アクセントの位置が変わるのが特徴的な舞曲である。

「サラバンド」 サラバンドでは本来、第2拍にアクセントを伴うが、この曲では、その固有のリズムが見られず、流麗な動きで進む。

「ロンドー」 ロンドーとは17世紀フランスで発展した舞曲であり、対を成す2つの楽想が交替する軽快で活発な曲である。

「カプリッチョ」 フーガ風の書法によりながら、自由な展開を見せる。

ブラームス：3つの間奏曲 Op.117

渋く重厚な作風を特色とするドイツ・ロマン派の作曲家、ヨハネス・ブラームス(1833～1897)の作品のなかで、晩年に書かれた4種のピアノ曲集(「7つの幻想曲」Op.116、「3つの間奏曲」Op.117、「6つの小品」Op.118、「4つの小品」Op.119)は、寂寞としていて、独特の枯れた味わいを含んでいる。個々の小品は、簡潔な形式でまとめられているが、晩年のブラームスらしい成熟した作曲技法も注目される。

Op.116と同じく1892年、イシルでの作と推定されているOp.117は、3つの間奏曲から成る曲集である。3曲ともゆるやかなテンポで書かれているが、その柔らかな流れのなかから、暗い影や寂しげな表情が現れる。

第1曲 変ホ長調、アンダンテ・モデラート。ここでブラームスは、ドイツの民族伝説などの研究を行った文学者ヘルダーの「民謡集」のなかから、次の詩句を掲げている。「やさしく眠れ、わが子よ、静かに安らかに眠れ。おまえが泣くのは、つらいことだ。」この詩のとおり、曲は子守歌風の、柔らかなで優しい音楽であり、主部では、主旋律が内声で歌われる。

第2曲 変ロ短調、アンダンテ・ノン・トロポ・エ・コン・モルト・エスプレッショネ。分散和音のなかに主旋律が隠されており、寂しげな秋の風を想わせる楽想が続く。

第3曲 嬰ハ短調、アンダンテ・コン・モート。3曲のなかで特に暗い表情がきわ立ち、不安と焦燥を交えたような響きに包まれている。

ショパン：ピアノ・ソナタ 第3番 ロ短調 Op.58

ポーランド出身の作曲家フレデリック・ショパン(1810～1849)の作品は、大半がピアノ曲であり、その天才的な創作力から数々の名作が生み出された。ピアノ・ソナタについては、3曲が残されている。第3番は1844年に作曲され、E.ドゥ・ペルトウイ伯爵夫人に献呈された。4楽章から成るこのソナタは、各楽章にショパンならではの洗練された美しい楽想が盛りこまれ、さらに、1曲のソナタとしての統一性や、スケールの大きさも注目される作品であり、ショパンのピアノ曲のなかで最も円熟した傑作の1つに数えられる。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ。ロ短調、ソナタ形式。重厚な第1主題と、優美な第2主題を中心に展開する。

第2楽章 スケルツォ：モルト・ヴィヴァーチェ。変ホ長調、3部形式。主部では軽快な動きが続くが、中間部ではロ長調に転じ、コラル風の静穏な曲想に落ち着く。そして再び主部となり、切れ目なく第3楽章に続く。

第3楽章 ラルゴ。ロ長調、3部形式。甘美な味わいに満ちた緩徐楽章。詩情を湛えた主部と、転調を重ねてたゆたうような美しさが紡ぎ出される中間部は、共に、ショパンらしい夢想的な世界を作り出している。

第4楽章 フィナーレ：プレスト・マ・ノン・タント。ロ短調、ロンド形式。明快かつ力強い流れを保つなか、豊かな楽想に彩られたフィナーレであり、劇的な高まりと共に、ソナタ全曲を堂々と締めくくる。